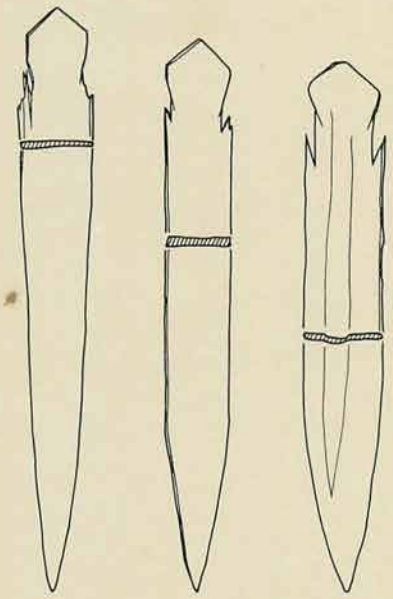
金沢市戸水C遺跡

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

（6）



1983・3

石川県教育委員会

例　　言

1　本書は、運輸省第一港湾建設局の委託により、昭和57年6月10日より昭和58年3月28日にかけて実施した金沢港泊地造成事業にかかる発掘調査の概要報告書である。なお、調査費用は同建設局が負担した。

2　調査にあたっては下記の方々の指導・助言を得た。

高堀勝喜（石川考古学研究会常任顧問）　荒木繁行（石川考古学研究会顧問）
桜井甚一（石川考古学研究会々長）　楢崎彰一（名古屋大学文学部教授）
河原純之（文化庁主任調査官）　吉岡康暢（県立郷土資料館資料課長）
福田弘光（石川考古学研究会々員）　伊林永幸（県立図書館古文書課主事）
河村好光（県立向陽高校教諭）　宮本哲郎（金沢市文化課主事）

3　第6次調査担当者

谷内尾晋司　三浦　純夫　芝田　悟　戸澗　幹夫

4　調査補助員

栃木　英道　山川　桂子

5　調査協力

田中・高柳・戸水・御供田・大友・南新保・正田・普正寺町有志、セントラル航業K.K 金沢大学々生有志

6　本書の図版作製にあたっては、石川県埋蔵文化財協会の協力を得た。

7　本書の執筆は、平田天秋（28・29頁）、栃木英道（10～13・17～23頁）、藤田邦雄（8・30・32頁）、戸澗幹夫（1～7・9・14～16・24～27・32頁）がそれぞれ担当し、編集は戸澗があたった。

表紙図版　戸水C遺跡出土の斎串

緑釉香炉

Ⅰ　遺跡の位置

戸水C遺跡は、国鉄金沢駅の北西約4.5 kmの金沢市戸水町地内に所在する。大野川、浅野川、犀川などの沖積作用によって形成された金沢平野北西部にあたり、付近一帯は自然湧水地帯である。遺跡は、大野川左岸の標高約0.8 mを測る低地に立地し、大野川を隔てた北側には、海岸砂丘(内灘砂丘)が発達している。西側は、日本海に面している。これまでは、水田地帯であったが、現在、金沢港泊地の造成・臨港工業地域として、旧景観は大きく失われ、それに伴う大野川の川幅拡大によって、遺跡の一部がすでに泊地として水没している。

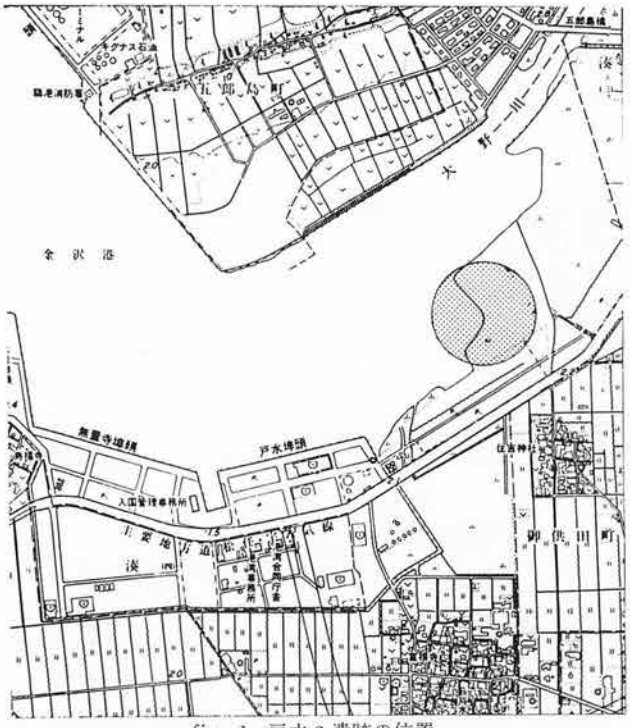


fig. 1　戸水c遺跡の位置

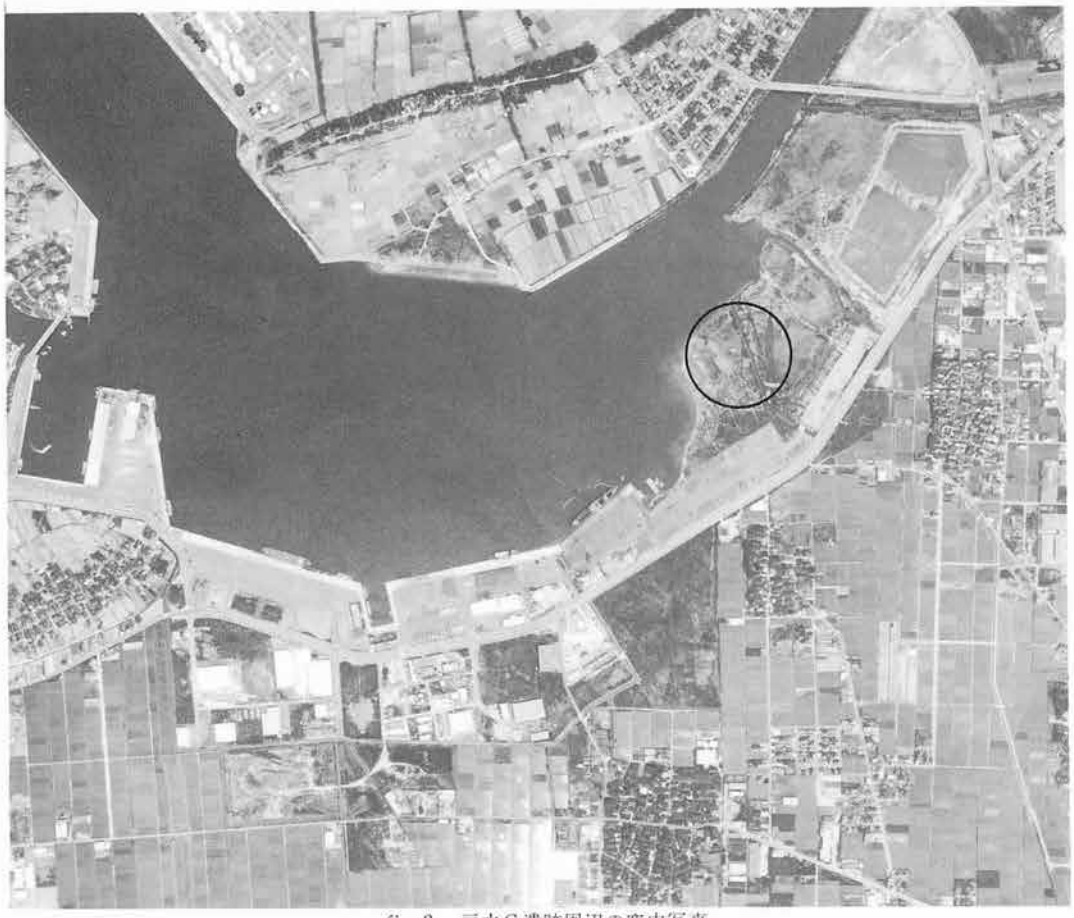


fig. 2　戸水C遺跡周辺の空中写真

fig. 3　周辺の遺跡分布

1、戸水C遺跡　2、近岡遺跡　3、大友遺跡　4、無量寺金沢港遺跡　5、無量寺遺跡　6、無量寺B遺跡　7、桂遺跡　8、畝田無量寺遺跡　9、畝田B遺跡　10、畝田遺跡　11、畝田大徳川遺跡　12、寺中畝田遺跡　13、寺中B遺跡　14、寺中遺跡　15、普正寺遺跡　16、戸水B遺跡　17、藤江C遺跡　18、藤江B遺跡　19、藤江A遺跡　20、南新保C遺跡　21、西念・南新保遺跡

II　周辺の主な遺跡

本遺跡の所在する金沢平野北西部は、県内でも有数の遺跡分布地域である。

縄文時代の遺跡では、本遺跡の北東に近接する**近岡遺跡**があり、弥生時代の遺跡は、本遺跡の南西部にあたる標高約2～4mの微高地に数多く分布している。なかでも、**寺中遺跡**、**畝田遺跡**、**戸水B遺跡**などは、県内弥生式土器の標式となる遺跡である。また、本遺跡の南東約2.5kmには、弥生後期に属する木製大形高坏や石剣などの貴重な資料が出土した**西念・南新保遺跡**がある。弥生終末から古墳時代に盛期を迎える遺跡は、急激な増加現象がみられ、本遺跡の西約1kmには、**無量寺遺跡**、**同B遺跡**、**桂遺跡**などがあり、南約2kmには**南新保C遺跡**、**同D遺跡**などがある。

奈良・平安期の遺跡については、本遺跡の南約2kmには、**藤江A・B遺跡**があり、特に藤江B遺跡では、「石田庄」と読める墨書土器が出土し、初期庄園を知るうえでの有効な資料となった。また、南西約1kmには大型掘立柱建物跡が検出された**畝田無量寺遺跡**や、本遺跡に近接する**大友遺跡**がある。これらの遺跡は、古代大野郷とその周辺の集落分布を知るうえで重要である。

一方、中世に至ると本遺跡一帯は富積保に含まれることになるが、西約3kmには著名な**普正寺遺跡**がある。

Ⅲ　調査の経緯

戸水C遺跡は、昭和45年に当地の遺跡踏査を続けてこられた荒木繁行氏（現石川考古学研究会顧問）によって発見された。遺跡は、金沢港泊地造成区域内にあたり、汀線付近は波浪のために遺物包含層が崩落し、多数の遺物が出土していたことから、学術調査の必要が地元学会より要請されてきた。同年、県教育委員会、運輸省七尾港工事々務所、石川考古学研究会の間で協議がもたれ、遺跡範囲確認調査を実施するとともに、初めての発掘調査が行われた。また、汀線沿いには、板塀を築いて崩落を防ぐ対応もなされた。しかしながら、昭和50年、波浪による遺跡崩落が再び問題化し、対応策が協議された。その結果、記録保存を前提とした発掘調査を数次にわけて実施することとなった。以後昭和50年度より6次の調査を経て今日に至っている。

fig. 4　汀線付近での調査

fig. 5　板屏による崩壊防止策

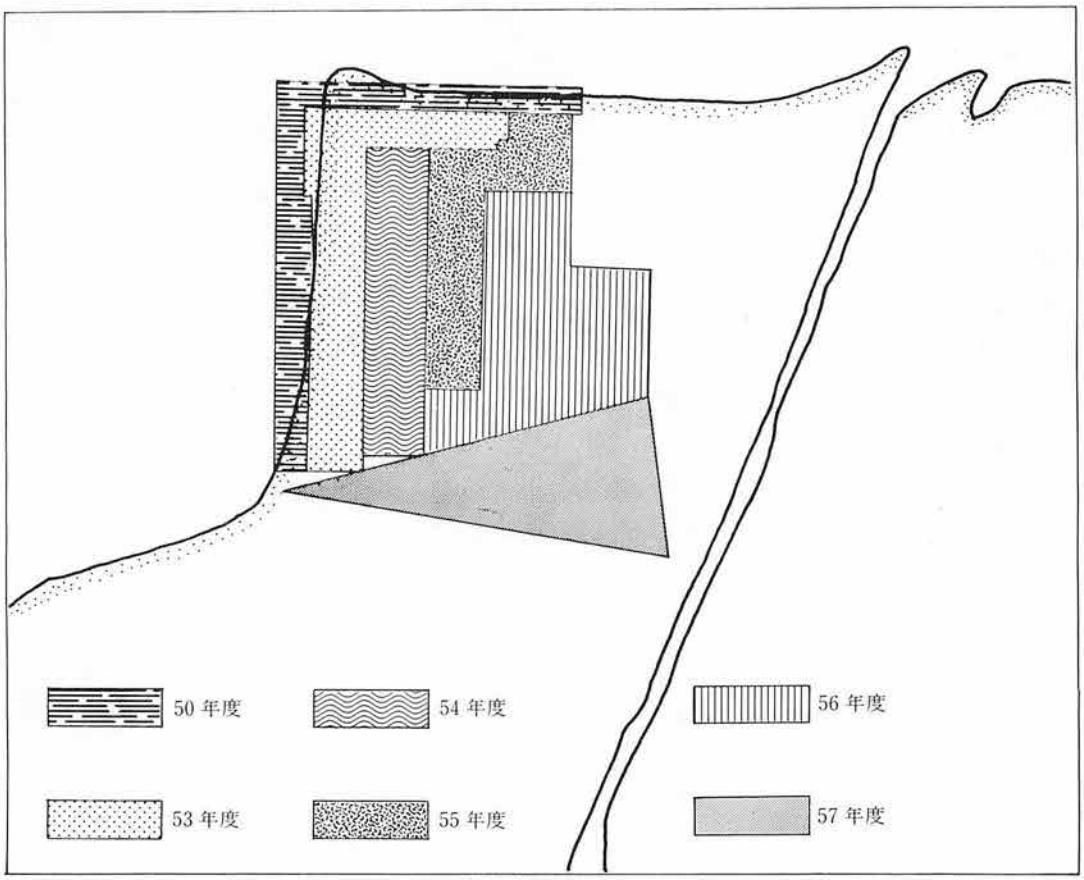


fig. 6　調査区配置図（1：2,500）

1　昭和50年度の調査

この調査は、浸蝕を受けている汀線周辺部を中心に約2,200 m²を対象とした。検出された主な遺構は、柴山出村式期や小松式期に比定される弥生中期の溝状遺構や、古墳時代前期の溝状遺構多数があり、最も顕著な遺構状況を示すのは平安中・後期に属するものであった。

平安期の遺構は、掘立柱建物跡2棟、井戸3基、溝状遺構や土坑などであった。建物跡は、桁行三間に梁行二間のものと桁行四間に梁行三間の2棟で、いずれも総柱の南北棟建物跡であった。出土遺物では緑釉・灰釉陶器が目立ち、特に、緑釉の中には、全国でも稀な唾壺が出土し、また、愛知県鳴海窯に類例が認められる陰花文を施した台付椀の出土もあった。その他、「依」、「大田」、「友」、「田」などと読める墨書土器多数が出土し、さらには、丸鞆形石銙も1点出土しており、下級官人クラスの存在を想起させるものであった。

中世の遺物は、断片的であるが、珠洲、越前、瀬戸などの国産陶磁器類の他、中国製磁器では、南宋代に比定される青磁がもっとも多く、白磁も若干認められた。

fig. 7　調査風景

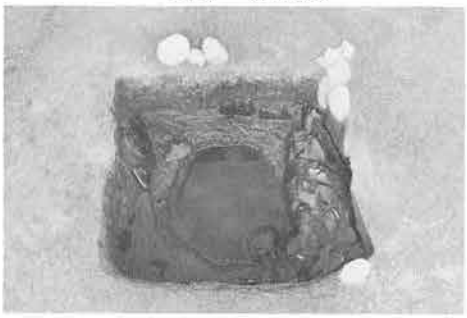


fig. 8　「まなこ」をもつ井戸

fig. 9　汀線付近で検出された井戸

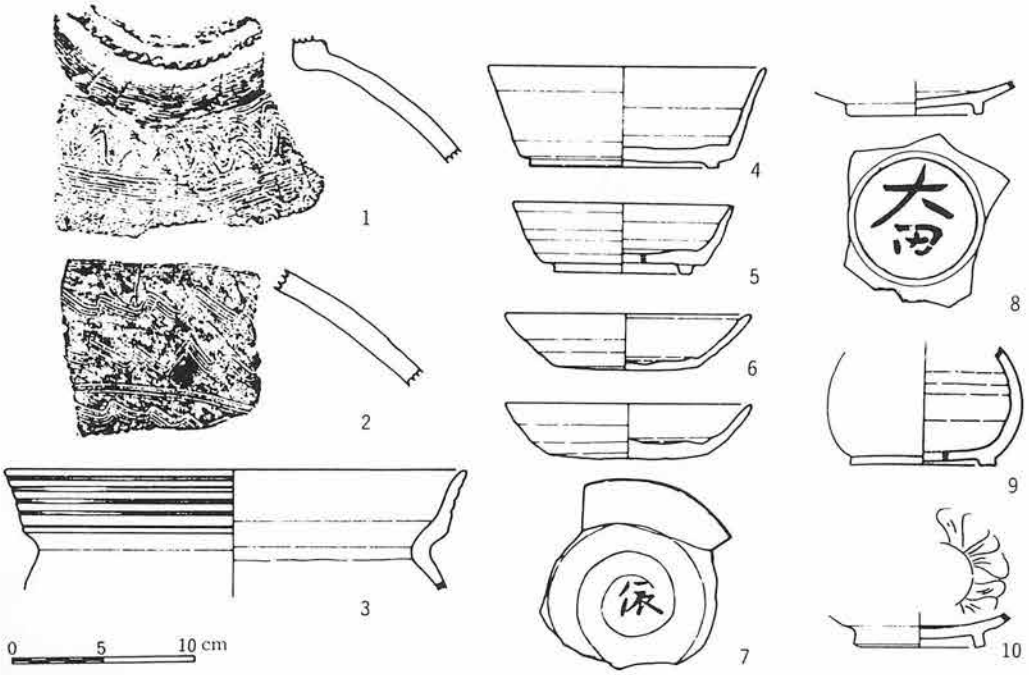


fig.10　昭和50年度調査区出土土器

2　昭和53年度の調査

50年度調査区に接する東側と南側部分の約2,000 m²を対象とした。

検出された主な遺構は、古墳時代前期の溝状遺構、平安時代に属する掘立柱建物跡と井戸、平安から中世にかけての多くの溝状遺構などが存在した。

建物跡は前回確認されていた2棟の未検出部分の追跡をするとともに、新たに2棟の検出があった。そのうちの1棟は、桁行四間、梁行二間の南北棟である。柱穴の掘方は、約120 cmを測る方形を呈し、それぞれに礎板を埋置させたもので、規格性に富む建物跡である。もう一方は、桁行二間、梁行一間の身舎の四面に付属施設が付く東西棟の特殊な建物跡（fig.12)である。その付属施設については、類例も少なく想定し難いが、縁に類する施設とも考えられるものであった。なお、柱穴の規模や配置においては規格性のとぼしいものであった。

fig. 11　掘立柱建物跡

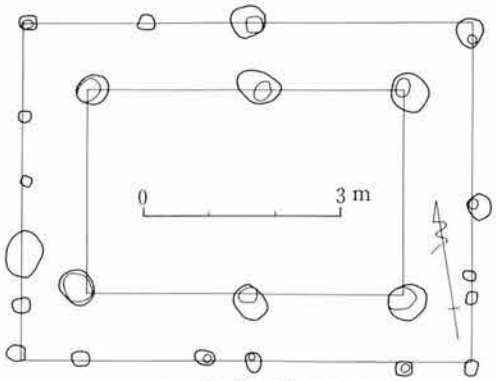


fig. 12　掘立柱建物跡平面図

fig. 13　倉庫様建物跡

fig. 14　M—38ピット緑釉香炉出土状況

3　昭和54年度の調査

前年度の東側約2,000 m²を対象とした。平安期に属する掘立柱建物跡や中世の大溝跡が主な遺構であった。建物跡は、桁行、梁行ともに二間の総柱の倉庫様建物と、桁行五間に梁行二間の南北棟建物跡であった。出土遺物で注目されるのは「七」と読める刻字がなされた緑釉香炉（fig. 15）があった。それは、径30 cm・深さ30 cmを測る小ピット（fig. 14）からの出土で、故意に破砕したとみられる状態であった。祭儀のあとで粉砕し、ピットの中に廃棄されたものであろう。

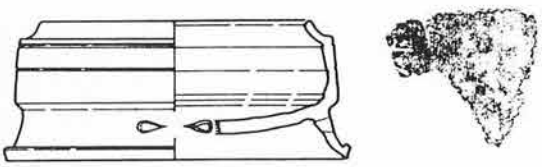


fig. 15　M—38ピット出土の緑釉香炉（S＝1/3）

fig. 16　調査風景

fig. 17　検出された大型建物跡

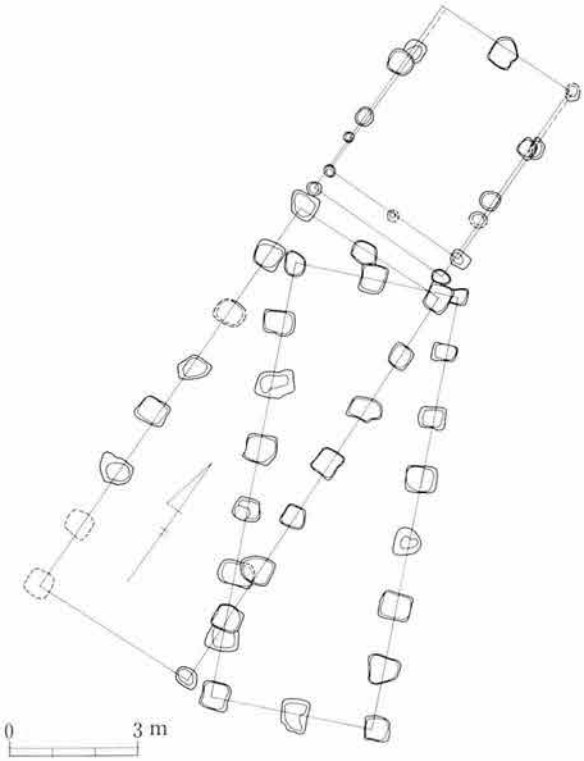


fig. 18　大型掘立柱建物跡平面図

4　昭和 55 年度の調査

前年度調査区の東側、約 2,000 m²を対象とした。検出された主な遺構は、古墳時代前期の井戸や溝状遺構、同後期の土坑、平安時代の掘立柱建物跡、井戸、溝状遺構などであった。

建物跡は、桁行七間、梁行二間の細長い南北棟建物が建替をともなって 2 棟検出されている。建替は、旧建物の柱や礎板を取り除き、柱穴を埋めもどして移築されている (fig. 18)。建替られた新建物には、北側妻中柱をのぞくすべての柱穴に礎板が設けられており、柱根もほぼ一尺を測る太いものであった。柱穴掘方は、一辺約 1 m の方形をなし、柱間寸法は桁で 8 尺強、梁で 11 尺弱である。県内でも有数の規模をもつ建物跡といえる。この建物跡に接して桁行三間、梁行二間の南北棟建物があり、これも建替がなされている。

出土遺物についてみると、一時に埋った溝中より「依」と読める墨書土器多数が集中して出土している点が注目され、その他にも「蔵」、「中」、「吉」などが認められた。また、新資料として円面硯(fig. 19) の出土があった。緑釉・灰釉の施釉陶器もかなり累積され、本遺跡 2 点石鈴も出土している。

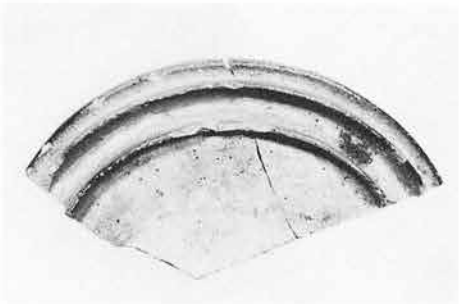


fig. 19　円面硯

5　昭和56年度の調査

前年度調査区の南東約3,800 m²を対象とした。検出された主な遺構は、縄文晩期の溝状遺構、弥生後期から古墳前期にかかる土坑、水路状遺構、古墳後期の溝、そして奈良・平安期の掘立柱建物、井戸、溝などであった。

水路状遺構は六条検出され、弥生後期から古墳前期にかけてある程度幅を持って機能していたと考えられる。そのうち三条は溝の覆土や土器の出土状況などから、弥生時代後期後半の法仏式の時期にはほぼ埋まっていたと推測される。一方、舟底状の落ち込みを有する溝が調査区中央を東西に走り、下層から法仏式の土器に混じってカゴ（fig. 21）が出土している。また上層からは布留式併行期の土器に伴ない径約1mの範囲で琴柱形石製品と管玉6点（fig.23）が集中して出土している。同様に布留式併行期の土器を伴う溝はもう一条確認されている。

建物跡は調査区南側で一棟検出できた。桁行五間、梁行二間のもので柱穴は不整円形をなし径50～70 cmを測る。柱根・礎板等の出土はなかった。

井戸は二基検出され、2号井戸は建物跡南西隅で確認された。井側内より斎串、箸状木器、特殊土師器の他「宅」、「東」、「奈」、「依」と読める墨書土器、大型獣骨などが出土し、祭祀儀礼を行った可能性を窺わせた。出土土器は平安中期初頭に属するものであった。

その他の遺物としては、円面硯、施釉陶器、時期不明の銅環、また建物跡付近から出土した石銙、鏡片がある。墨書土器も多数あり、「依」をはじめとして「廣人」と読めるものが確認されている。

fig. 20　作業風景

fig. 21　カゴ出土状況

fig. 22　弥生時代後期の土坑

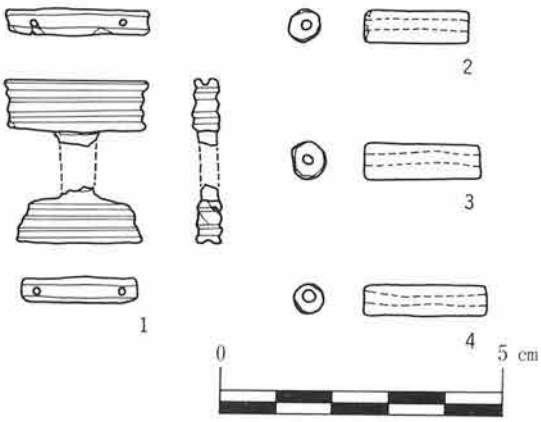


fig.23　琴柱型石製品と管玉実測図

Ⅳ　本年度の調査概要

本年度の調査は、これまでの調査区の南側にあたる約3,400 m²を対象とした。弥生時代に比定されるものには、中期の柴山出村期の土坑をはじめ、後期の溝状遺構や土坑群が検出された。また、包含層中より遠賀川系土器片1点が出土し注目された。古墳時代では、前期の前方後方形周溝状遺構や後期の土坑などがあった。平安期では、前期から中期を中心とする掘立柱建物跡や井戸、溝状遺構などがあった。中世では、鎌倉期の井戸や室町期の溝状遺構と土坑が検出された。

出土品については、従来のように平安期のものが圧倒的に多く、多数の墨書土器や緑釉・灰釉陶器があり、本遺跡三点目の石銙、鏡片、和同開珎などの銅銭も出土している。

ところで、本年度の調査では航空写真測量が導入された。それによって、これまで調査員不足から冬期の悪条件下にまで及んでいた実測作業の能率化が計られ、また、遺跡の性格を知るうえで垂直写真が有効な活用資料となった。

fig. 24　第6次調査区

fig. 25　航空写真測量風景

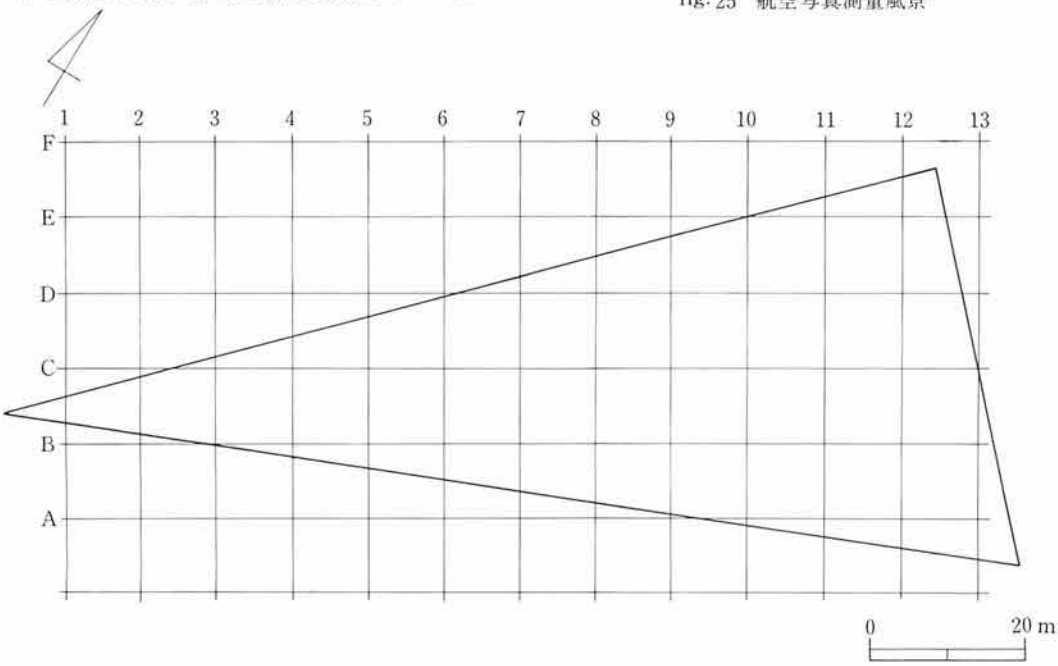


fig. 26　第6次調査区グリッド模式図

1　弥生式土器

○遠賀川系土器（fig.27の1）

1は口径25 cm（推）を測り、口縁端部が外側へ突出し刻目を有する遠賀川系の甕形土器で、C—6区遺物包含層より出土した。北九州地方を初源地とする遠賀川系土器は、近畿、東海地方や、丹後半島、若狭湾沿岸地方などに見られ、県内の出土例としては、鳥越村下吉谷遺跡出土の壺形土器[(1)]がすでに知られているが、甕形土器の出土は本遺跡が初例である。

○中期初頭の土器（fig.27の2～5）

2は工字文・沈線、3～5は条痕文（5の縁端部は、波状櫛状具文・刺突文）が外面に施されており、いずれも柴山出村遺跡を標式とする一群と考えられよう。2～4はD—5区9号溝下層からの一括出土であり、5はD—10区25号溝からの出土である。

○後期後半の土器（fig.27の6～8）と大形石斧（fig. 2の9）

本調査では、後期後半の土坑が3基（23・28・29号土坑）検出された。6～8はC—7区29号土坑出土の一括資料で、ほぼ直立する有段口縁体外面に擬凹線が施され、口縁端部が比較的厚く丸みをもっている甕形土器である。

9は長さ11 cm最大幅11.6 cm厚さ5 cmを測る打製石斧である。C—7区28号土坑内地山直上から、後期後半の甕形土器、高坏形土器とともに出土した。

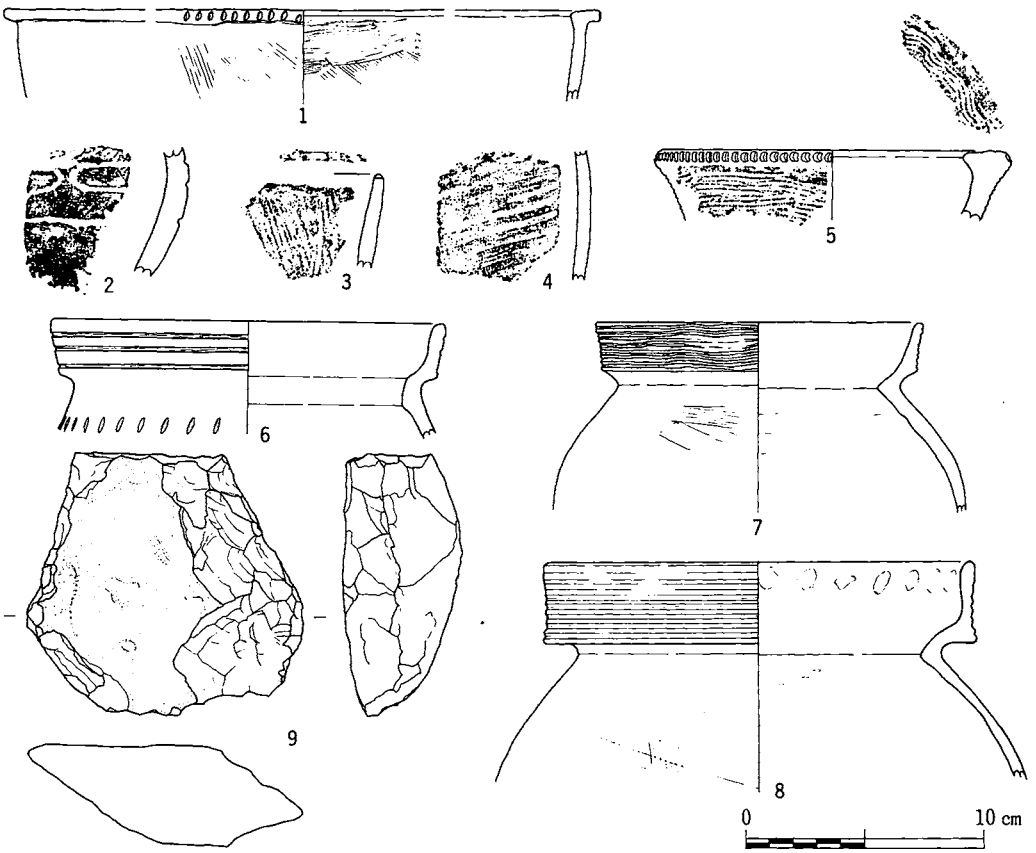


fig. 27　弥生式土器と石器

2　B—7・8区前方後方形周溝状遺構(fig. 28・29)

上幅70～90 cm、深さ20～40 cmを測る溝が方形に周り、外側で南北約6.5 m、東西約7 mを測る。東側ではややくびれ、中央部が1.25 m～2 m掘り残された形となっている。周溝の内側では、一部盛土とみられるところもあったが、平安期のピットなどと多く切りあっていたこともあり、埋葬主体などは検出されなかった。周溝内覆土から出土した土器は少片が多く、ほとんど実測し得なかったものの、周溝の北東及び南東端の地山直上からは、それぞれ高坏と甕が出土した(fig.28の1・2)。ともに古墳時代前期の所産と考えられる。付近では、弥生後期後半の土坑（3基）や溝は確認されているが、古墳時代前期の遺構は検出されていない。周溝の北東及び南東端が、独立した2基の土坑であるという可能性も否定できないため、遺構の時期や性格については、なお検討の必要があると思われる。

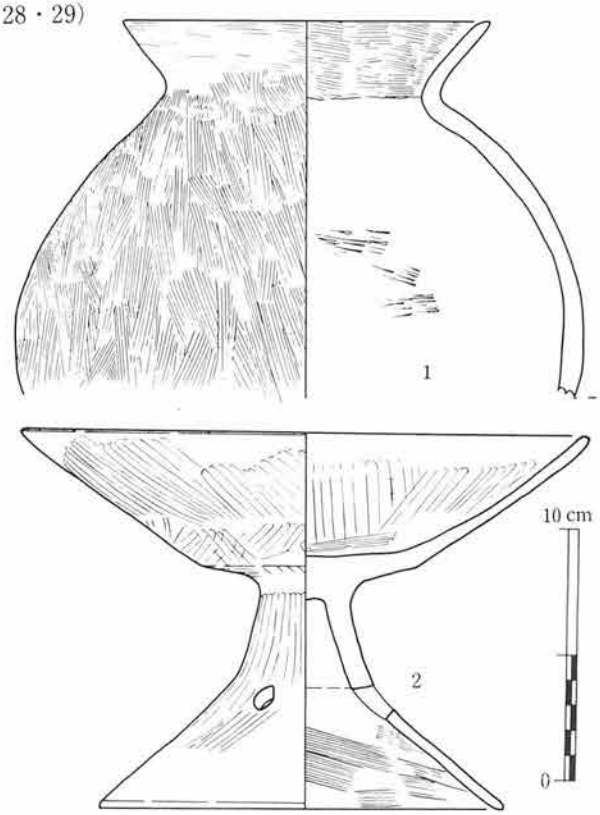


fig. 28　前方後方形周溝状遺構出土土器実測図

fig. 29　前方後方形周溝状遺構

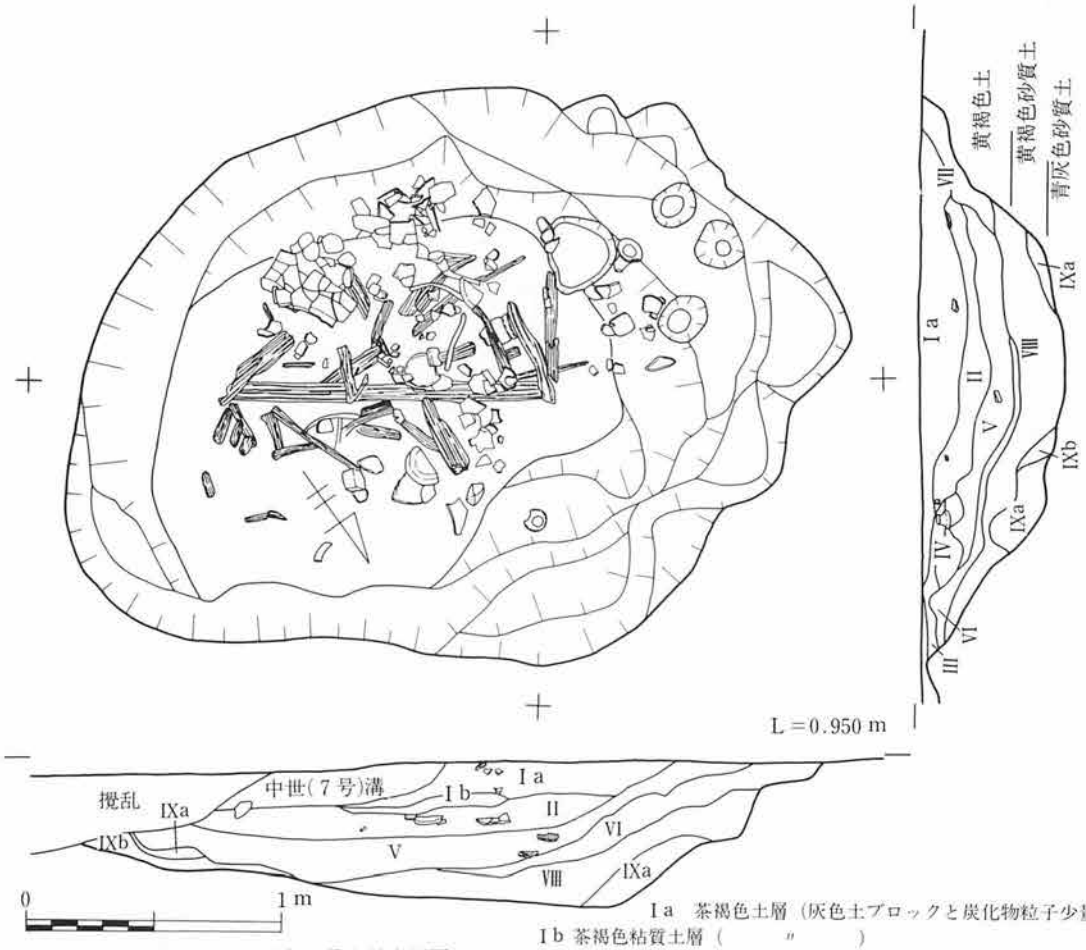


fig. 30　C—4・5区10号土坑実測図

Ia　茶褐色土層（灰色土ブロックと炭化物粒子少量含）
Ib 茶褐色粘質土層（　〃　）
II　茶褐色土層（炭化物多量含、灰色土、黄褐色土ブロック含）
III　暗茶褐色土層（灰色土ブロック含）
IV　茶褐色土層（炭化物粒子と灰色土、黄褐色土ブロック含）
V　暗茶褐色弱粘質土層（黒色土ブロック含）
VI　暗灰褐色粘質土層（黒褐色土、黄褐色砂質地山土ブロック含）
VII　暗茶灰色土層
VIII　暗茶褐色粘質土層（黒色土ブロック含）
IXa　暗茶褐色粘質土層（黄褐色土ブロック多量含）
IXb　暗茶褐色粘質土層（青灰色土ブロック多量含）

3　C—4・5区10号土坑（fig.30～32）

六世紀前半に比定される土坑である。平面プランは楕円形を呈する。深さは57 cmを測り、黄褐色砂質土（地山）から青灰色砂質土まで掘り込んでいる。遺物は主にIa～V層から出土した。VI層は黄褐色砂質地山土が多量にブロック状に混入しており、人為的な埋め込みの可能性がある。土器は全体では須恵器坏身3点、同坏蓋3点、同壺1点、土師器甕17点、同高坏2点、同椀（内面黒色を含む）11点を実測し得た。fig.32の1～11はその一部である。石器は管玉が1点（fig.32の12）出土した。木製遺物（自然木を含む）も多く出土したが、遺存状態が悪く取りあげ可能なものは少なかった。

fig. 31　10号土坑

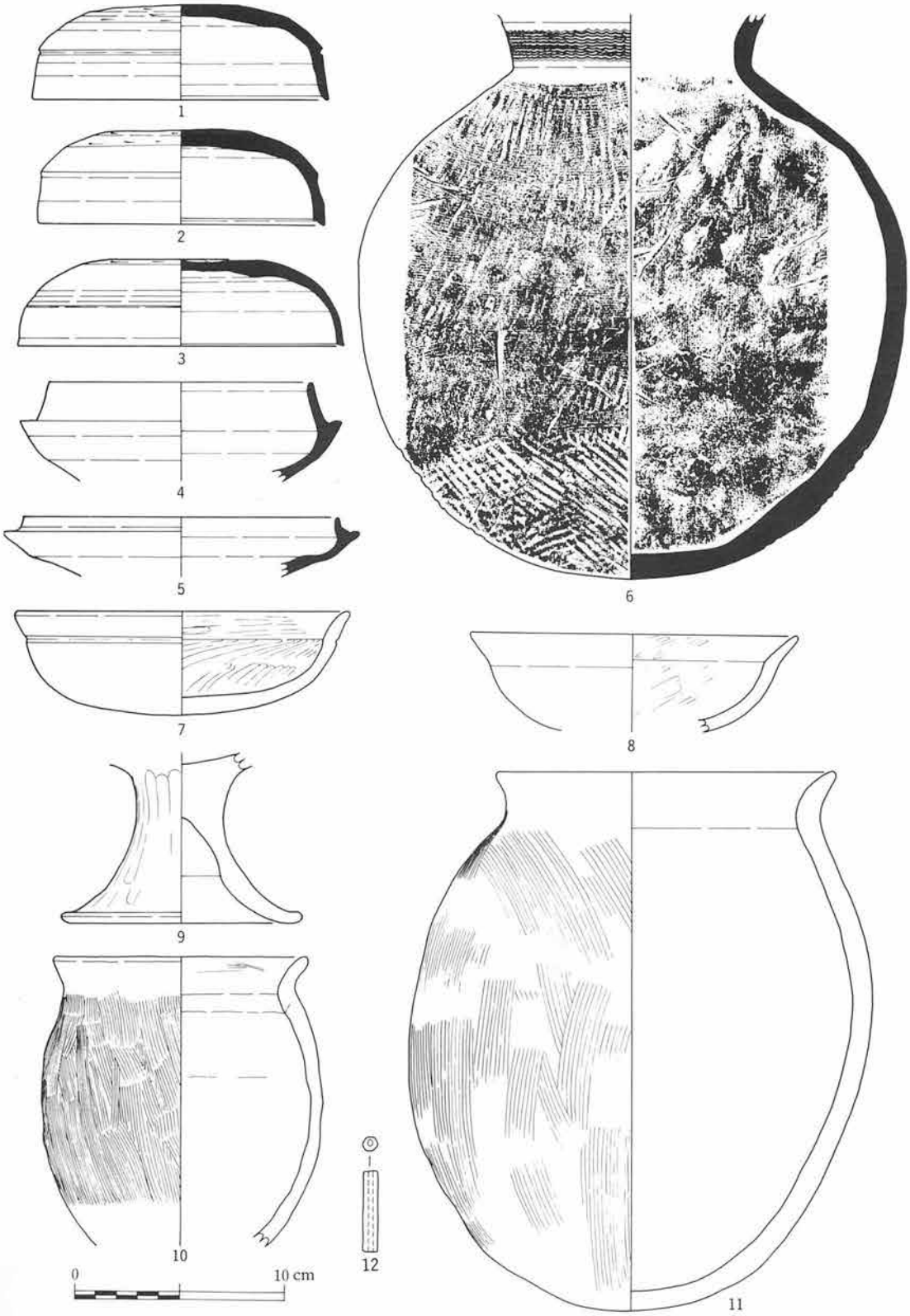


fig. 32　C－4・5区10号土坑出土土器等実測図

4　掘立柱建物跡

本年度の調査では、11棟の建物跡が検出でき、平安前期末～同中期を中心にして、少なくとも三期の配置替えが想定された。注目されたのは、6間×2間の大型南北棟建物で、周辺から施釉陶器や墨書土器をはじめ鏡片も出土し、中心的な建物であることを物語るものであった。本遺跡における建物跡の各期の配置構造やその他の遺構との関連などについては、今迄の調査成果と総合的に検討しなければならないが、概ね、約50～60 mの空地部分を隔てて、東西二つの建物跡群に分つことができるようである。本年度の建物跡は、その東側建物群にあたる。

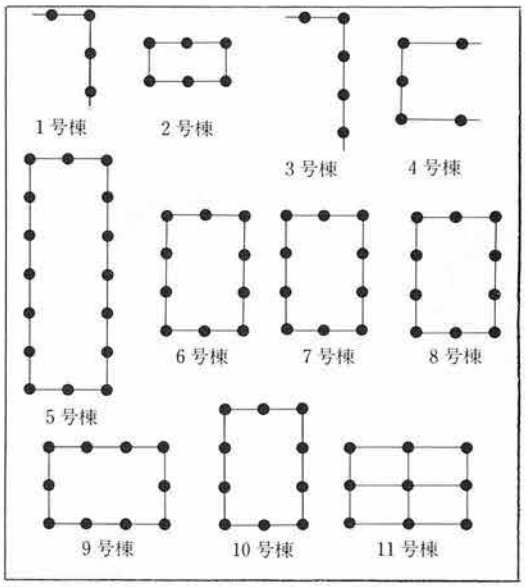


fig. 33　第6次調査区内掘立柱建物跡

fig. 34　掘立柱

第６次調査区内掘立柱建物跡一覧表

建物NO.	桁行×梁行	方　向	柱間寸法		掘　　方	柱根跡	床面積	備　　考
			桁　行	梁　行				
1	東柱列１間 南柱列２間				径約50cm			一部調査区外で全体規模不明。
2	２間×１間	東西棟	７尺強	７尺	径約30cm		約10m²	
3	北柱列３間 西柱列１間				径約30cm			一部調査区外で全体規模不明。
4	西柱列２間 南･北柱列1間				径約80cm			近代溝によって切られ全体規模不明。根固め石を使用
5	６間×２間	南北棟	８尺強	８尺強	50～70cm の不整円形		約75m²	掘方より緑釉２点、灰釉１点出土。
6	３間×２間	南北棟	８尺強	８尺強	径約60cm		約37m²	掘方より灰釉１点出土。
7	３間×２間	南北棟	７尺強	７尺強	径約60cm	径約20cm	約32m²	掘方より墨書土器「上」出土。
8	３間×２間	南北棟	８尺	８尺	径約50～60cm	径約20cm	約34m²	
9	３間×２間	東西棟	７尺	８尺	約50～60cm 方形	径約18cm	約30m²	
10	３間×２間	南北棟	７尺弱	８尺	約50～60cm 方形	径約20cm	約29m²	掘方より和同開珎などの銅銭出土。
11	２間×２間	東西棟	９尺	７尺	約50～70cm 隅丸方形		約23m²	掘方より墨書土器「上」出土。

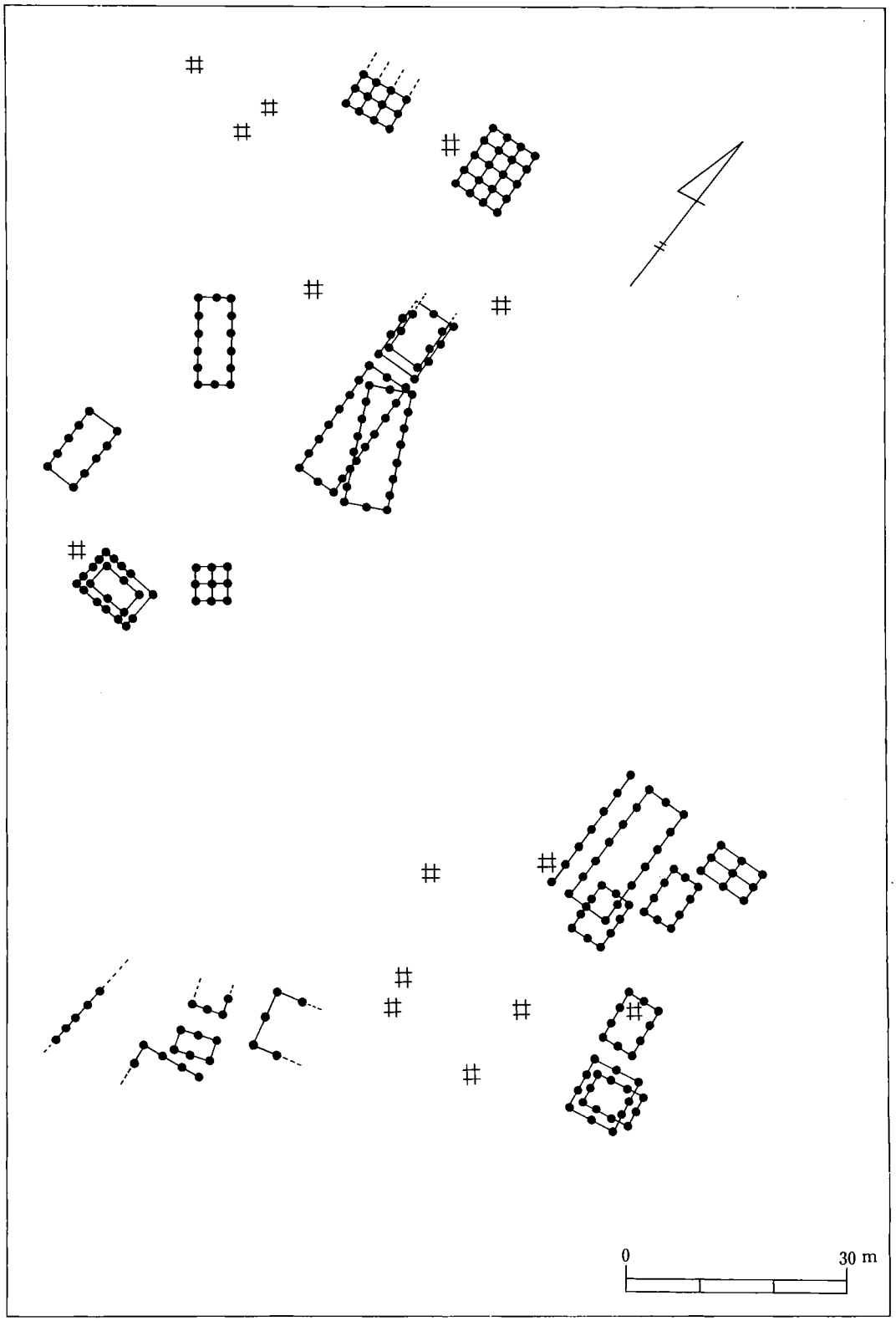


fig. 35　戸水C遺跡主要建物跡配置概念図

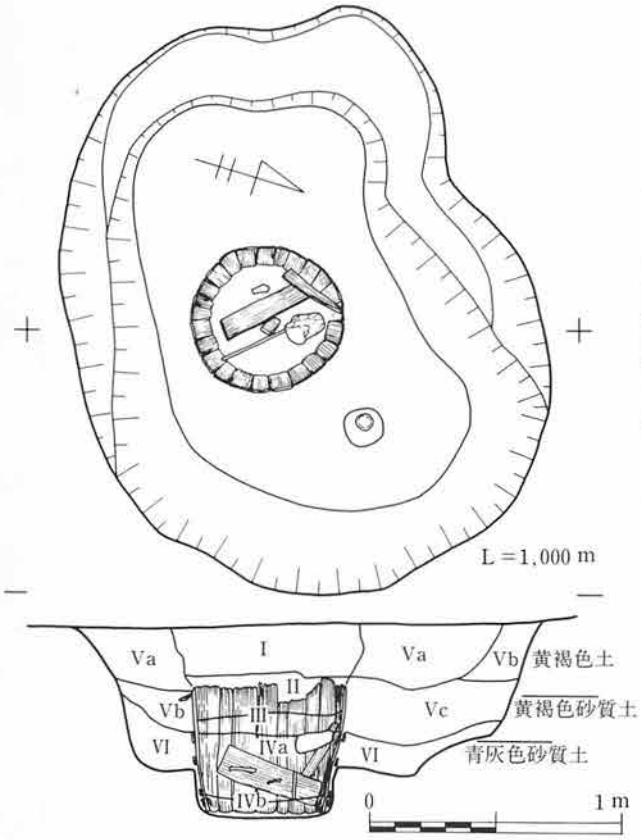


fig. 37　B－6区1号井戸実測図

fig. 36　1号井戸

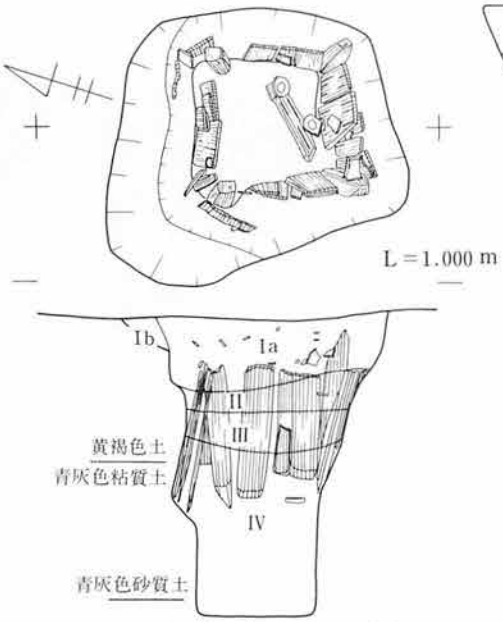
I 灰色弱粘質土層（黒灰色砂質土、黄褐色土ブロック少量含）
II 淡黒色砂質土層
III 黒灰色土層（黄褐色土ブロック多量含）
IVa 黒灰褐色粘質土層（青灰色砂質土ブロック含）
IVb 黒灰褐色粘質土層（青灰色砂質土ブロック多量含）
Va 黒灰色砂質土層（暗灰色土、黄褐色土ブロック多量含）
Vb 黒灰色砂質土層（暗灰色土、黄褐色土ブロック少量含）
Vc 淡黒灰色弱粘質土層
VI 黒色粘質土層

5　B－6区1号井戸（fig. 36～39）

円形桶側型井側をもつ鎌倉末期の井戸である。掘方は平面プランがほぼ楕円形（2.3×1.8 m）を呈し、深さは57 cmを測る。井側は、残存長50 cm前後、幅6～9 cm、厚さ約1 cmを測る板を24枚円形に組み合わせ、井側中位から下位にかけて計4本の箍（たが）をはめたもので、内径44（下位）～58 cm（上位）を測る。井戸の最深部は深さ75 cm（L＝0.13 m）を測り、青灰色砂質土に達している。掘方の北東側地山直上から、漆塗の木製椀が出土（L＝0.236 m）した。同椀は黒地に朱色の文様が施された完形品である。井側内からは擂鉢（珠洲焼）・灯明皿の破片などが出土している。土層は埋土（V・VI層）と井側内覆土（I～IV層）が判別し得た。特に、I層は今回の調査で中世の遺構覆土に一般的にみられた灰色性を基調としている。

fig. 38　1号井戸細部

fig. 39　漆椀出土状況



Ⅰa 黒灰褐色土層（灰色土ブロック含）
Ⅰb 黒灰褐色土層（灰色土、黄褐色土ブロック含）
Ⅱ 黒褐色土層
Ⅲ 黒褐色弱粘質土層
Ⅳ 黒褐色粘質土層（青灰色粘質土ブロック含）

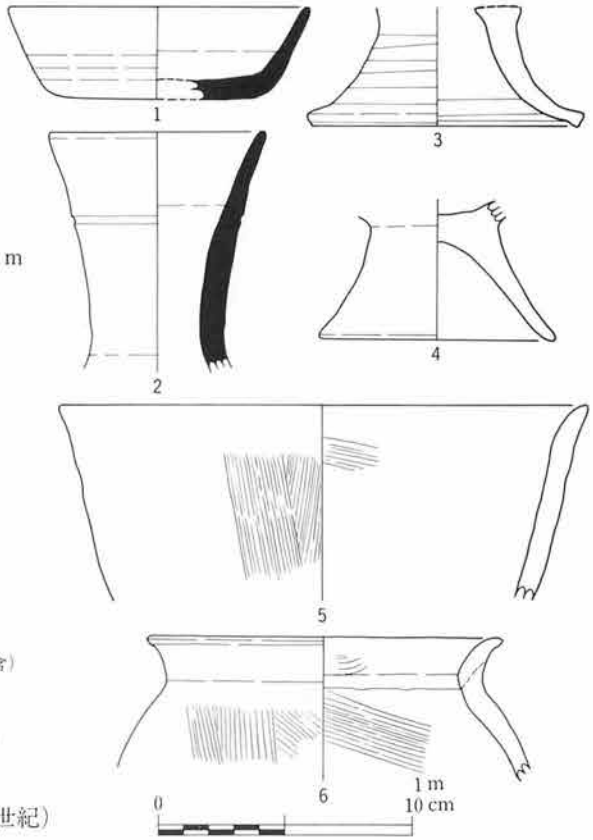


fig. 40　C－7区2号井戸・同出土土器実測図

6　C－7区2号井戸（fig. 40・41）

方形隅柱型井側をもつ奈良時代前半（8世紀）の井戸である。掘方は北西側が二段掘状に広げられているものの、平面プランは一辺が0.7～0.9 mのほぼ方形と考えられる。井側は、7～8 cm角で残存長60 cm弱を測る隅柱と、残存長60 cm弱、幅8～20 cm、厚さ約2 cmを測る側板からなり、内側で一辺約50 cmを測る。隅柱には横桟を挿入したような痕跡はなく、井側内からも横桟と考えられるような木製遺物も出土していないため、方形隅柱横桟型井側を持つ井戸とは異なる構造を有すると考えられる。これに対して、隅柱の下端部は杭状に削り出してあり、側板の下端部も斜めにカット（断面で台形状）され、ともに打ち込みに適したような形状を有している。側板は2～4枚重複して検出された個所があり、外側の地山にくい込んでいる側板などは、遺存状態が悪く取りあげられないものが多かった。井側の下端までの深さは75cmを測るが、井戸本体はさらに43 cm下り（L＝－0.33 m）、青灰色砂質土に達している。遺物は主としてⅠ層から出土したが、量的には少ない。そのなかで土器は、須恵器坏1点、同瓶1点、土師器高坏2点、同甕2点を実側し得た（fig. 40の1～6）。

fig. 41　C－7区2号井戸

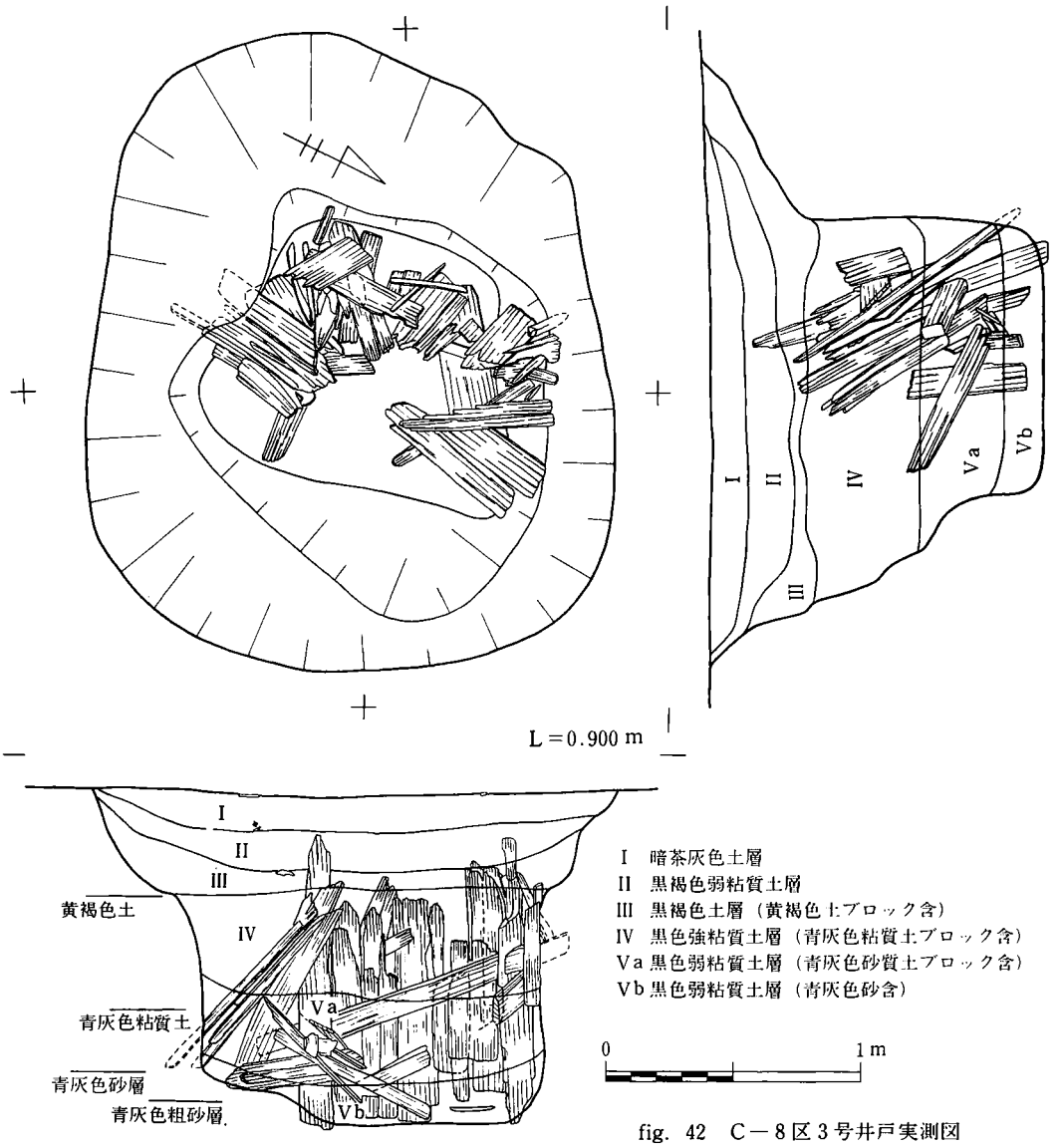


fig. 42　C－8区3号井戸実測図

7　C－8区3号井戸（fig. 42～46）

方形隅柱横桟型井側をもつ平安中期後半（10世紀後半）の井戸である。掘方は平面プランが隅丸方形（2.35×2.65 m）を呈する。井側は、残存長120 cm前後を測る隅柱と、残存長100 cm前後、幅15～20 cm、厚さ約2 cmを測る側板、及び5×8 cm角で長さ130 cmを測る横桟などからなり、内側で1辺70 cm前後を測る。抜きとりのためか東側の井側が検出できず、土圧によって傾き倒れている側板もあり、完全には復し得ない。井戸最深部は深さ130 cm（L＝－0.57 m）を測り、青灰色粗砂層に達している。遺物――土師器坏、同高台付坏、同甕（fig. 46の1～16）などの他、若干の須恵器片、木製遺物、自然遺物などが出土している――は上層（I～III）からも出土したが、下層（IV～Vb－特にVa）から多く出土した。

fig. 43　3号井戸

fig. 44　同上拡大

fig. 45　実測作業風景

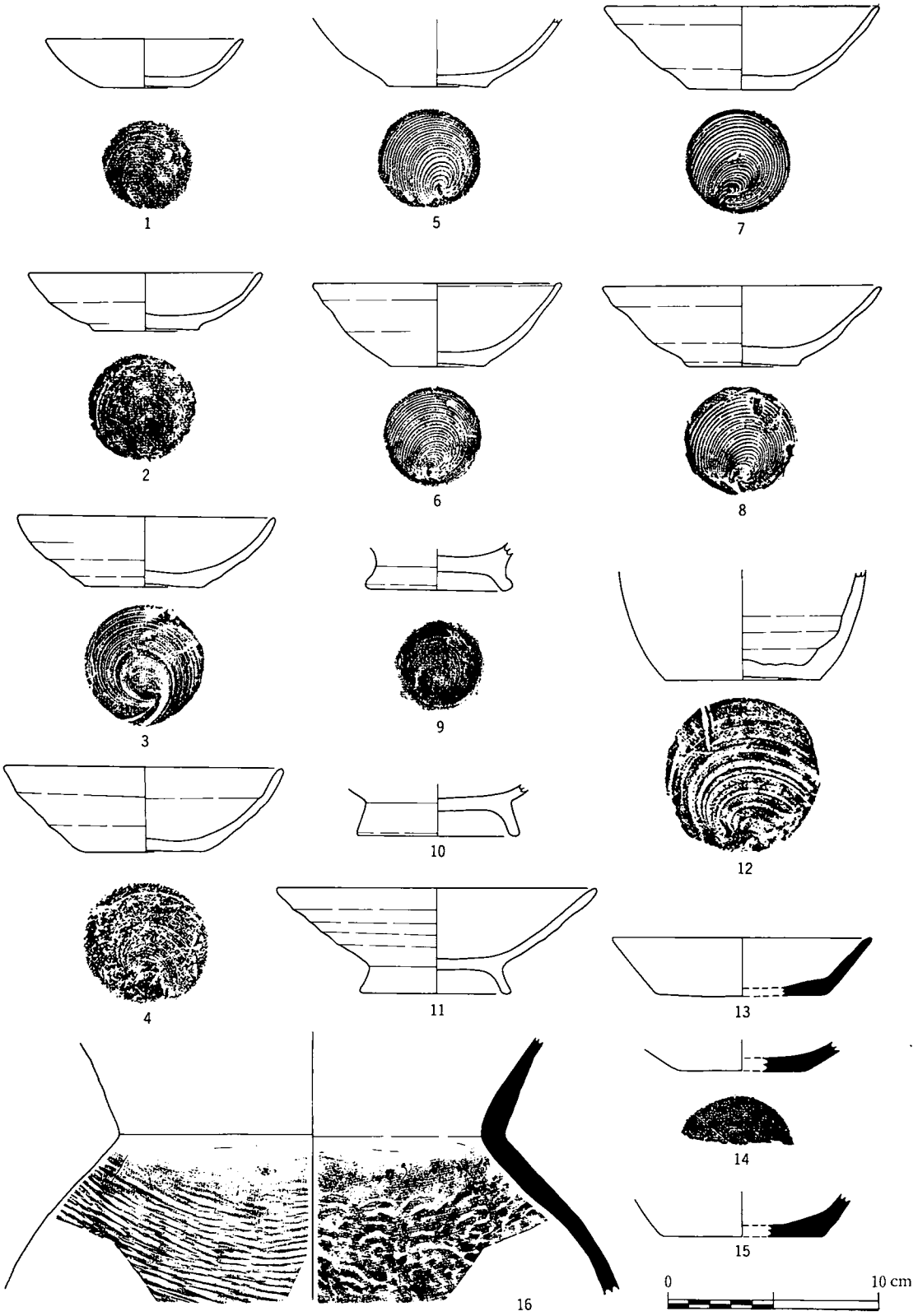


fig. 46　3号井戸出土土器実測図

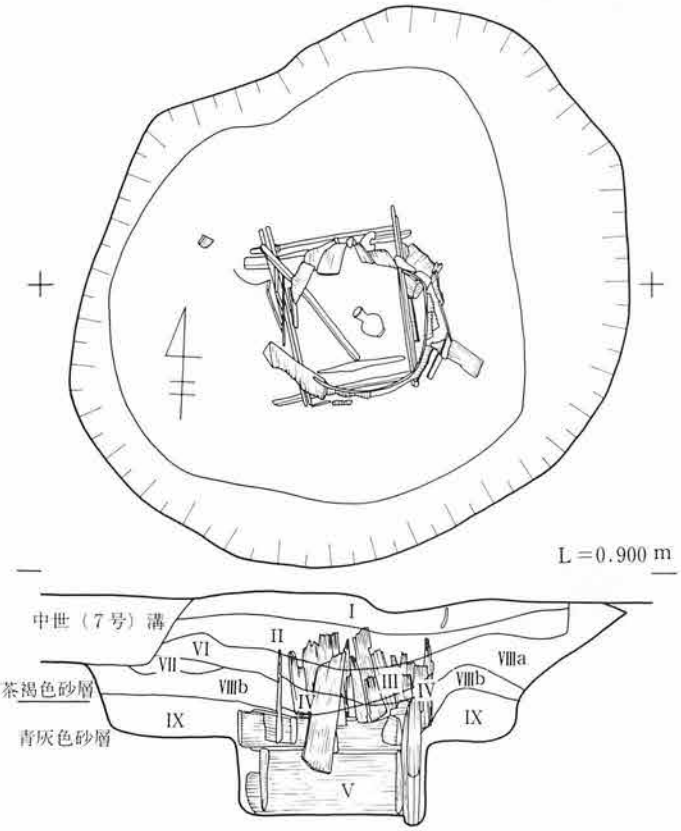


fig. 47　C－5区4号井戸実測図

fig. 48　瓶出土状況

I　淡茶褐色微砂質土層
II　濁褐色砂質土層（黒褐色土、灰色砂質土ブロック含）
III　黒褐色弱粘質土層（暗茶褐色腐植物含）
IV　灰青色砂層
V　黒色粘質土層
VI　濁茶灰色砂質土層
VII　黒灰色弱粘質土層
VIIIa　淡灰褐色砂層（黒褐色、茶褐色土ブロック含）
VIIIb　淡灰褐色砂層（黒褐色ブロック多量含）
IX　明青灰色砂層（黒色粘質土ブロック少量含）

0　1 m

8　C－5区4号井戸（fig.47・48・50・51）
D－5区5号井戸（fig. 49）

平安前期末～中期初頭（9世紀末～10世初頭）に比定される4号井戸は、井筒の構造という点からみると累積井筒の一種である。掘方は、平面プランがほぼ円形（直径約2.25 m）を呈し、深さ57 cmを測る。井筒下段は長さ60～70 cm、幅10～25 cm、厚さ約4 cmを測る板を8枚セイロ組状（内側で一辺40～60 cm）に組み合わせ、同上段は残存長50 cm前後、幅8～15 cm、厚さ約2 cmを測る縦板を多角形状（内径約50 cm）に組み合わせたものである。下段の外側には数枚の板が、上段の内側には、桜の表皮によって曲物状に仕上げられた板（幅約6 cm、厚さ1 cm）が、それぞれあてがわれている。井戸の最深部は深さ88 cm（L＝－0.07 m）を測り、青灰色砂層に達している。土器は須恵器蓋、同坏、同高台付坏、同盤、同瓶、土師器甕（fig.51の1～11）などが出土している。また5号井戸は、4号井戸に近接し、掘方の形状、大きさ、深さや井戸最深部の海抜高度（L＝0.01 m）などは4号井戸に類似するが、井側やその他主要な板が抜きとられたためか、検出されたものはわずかで、全体的な構造を知ることはできなかった。

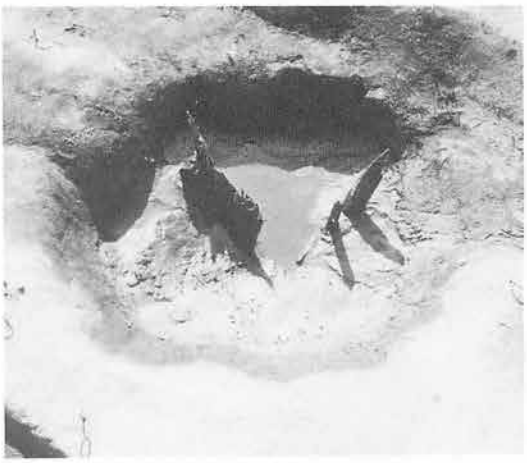


fig. 49　D－5区5号井戸

fig. 50　C－5区　4号井戸

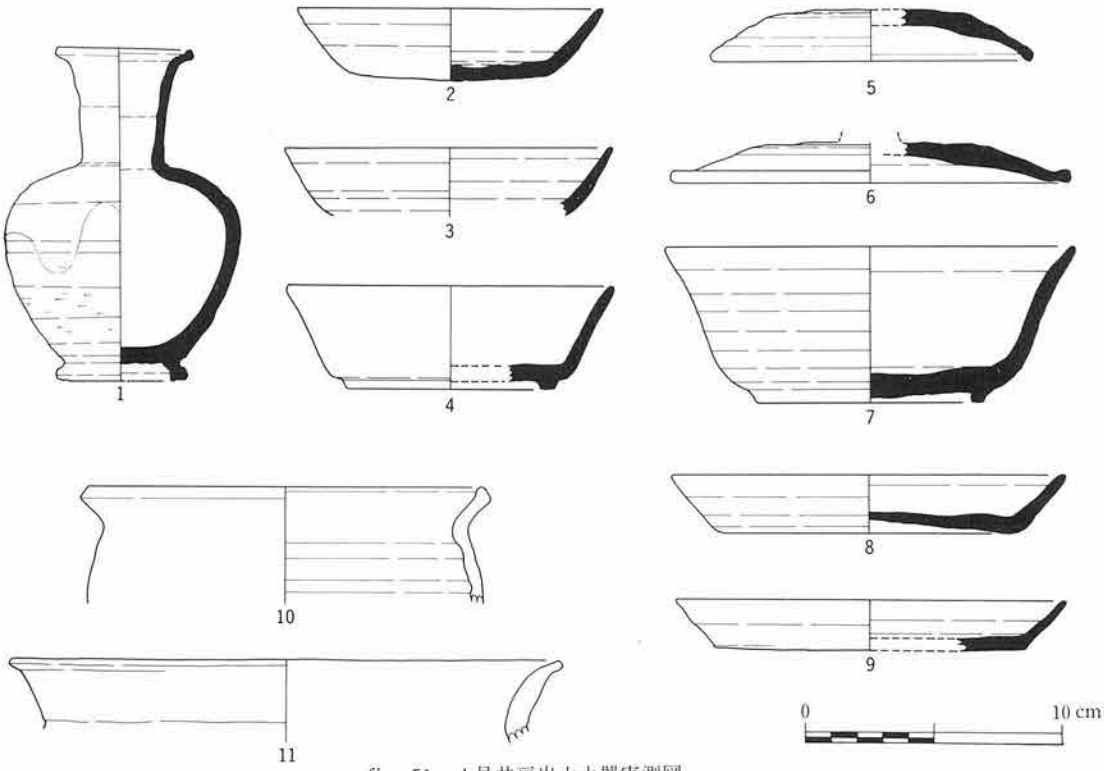


fig. 51　4号井戸出土土器実測図

9　溝状遺構（fig. 52）

弥生時代から中世の各時代にわたる溝状遺構が約40条検出された。なかでも平安期に比定されるものが最も多い。平安期の溝の中には、上幅約2.5～3m、深さ約30cm前後を測り建物跡の東側を画すように南北に平行して走る二条の溝（30・35号溝）がある。それらの溝底面には、約80cm程の間隔をおいて柱穴が検出され、杭列が存在したことが想定された。また、それらの溝の間約2.5mは「道」となる可能性があり、その場合、両溝が「道」にともなう側溝とも考えられる。

その他に、幅約1m、長さ約10mの浅い溝状遺構が二条（26・27号溝）あり、緑釉、墨書土器、漆塗りの坏や椀などを含む一括遺物が出土している。

fig. 52　杭列をもつ溝

○　26号溝出土土器（fig.53、1～8須恵器・9～19土師器）

1～5は無高台坏で、器高3cm前後、口径13～14cmを測る。7は小形の有台坏で、8は口径16cm、器高6.7cmの大振りの有台坏である。坏は、全体的に、器面は水挽きによる起伏がみられ、口縁部付近での引き伸しが強く、口縁端部は丸味をもち、底面にはヘラ起し痕がみられる。9・10は口径17cm前後、器高5.5cm前後を測る大振りの黒色椀で、外面下半は回転によるヘラ削りがみられる。また、9の内面には漆の付着が著しい。13～16は口径20～24cmを測る大振りの甕で、「く」の字の口縁端を上方向に折りまげている。15・16は内面は強いナデによって凹状を呈する。なお、本溝より、fig. 56の4に示した墨書土器や、fig. 57の10の緑釉陶器も出土している。

○27号溝出土土器（fig.54、1～6・8須恵器、9～15土師器）

1・2・8は、須恵器の無高台坏である。1は口径10.8cm、器高3.4cmを測る小振りのもので口唇部内外面に漆が付着している。その他は、口径12cm前後、器高3.5cm前後のものである。3～5は有台坏で、3・4は口径14.5cm前後、器高5.5～6cmの大振りのものである。坏類は、26号溝と同様で、器面は水挽きによる起伏がみられ、引き上げが強い。底面にはヘラ起し痕をとどめている。6は、双耳瓶の口頸部であろう。10は、外面下半がヘラ削りされた黒色椀で、内面には漆が付着している。11～15は甕で、小振りの11・12と大振りの13～15がある。全体的に口縁部の上方向への折りまげが弱く、大振りのものは内側にナデによる稜線がみられる。

以上、26・27号溝出土土器は、須恵器に糸切り手法が認められないことから、小松市戸津九号窯(2)より古く位置付けられ、富来町小袋1号窯(3)に類似するものと考えられる。従って、両溝の時期は、平安前期末～中期初頭に比定できよう。

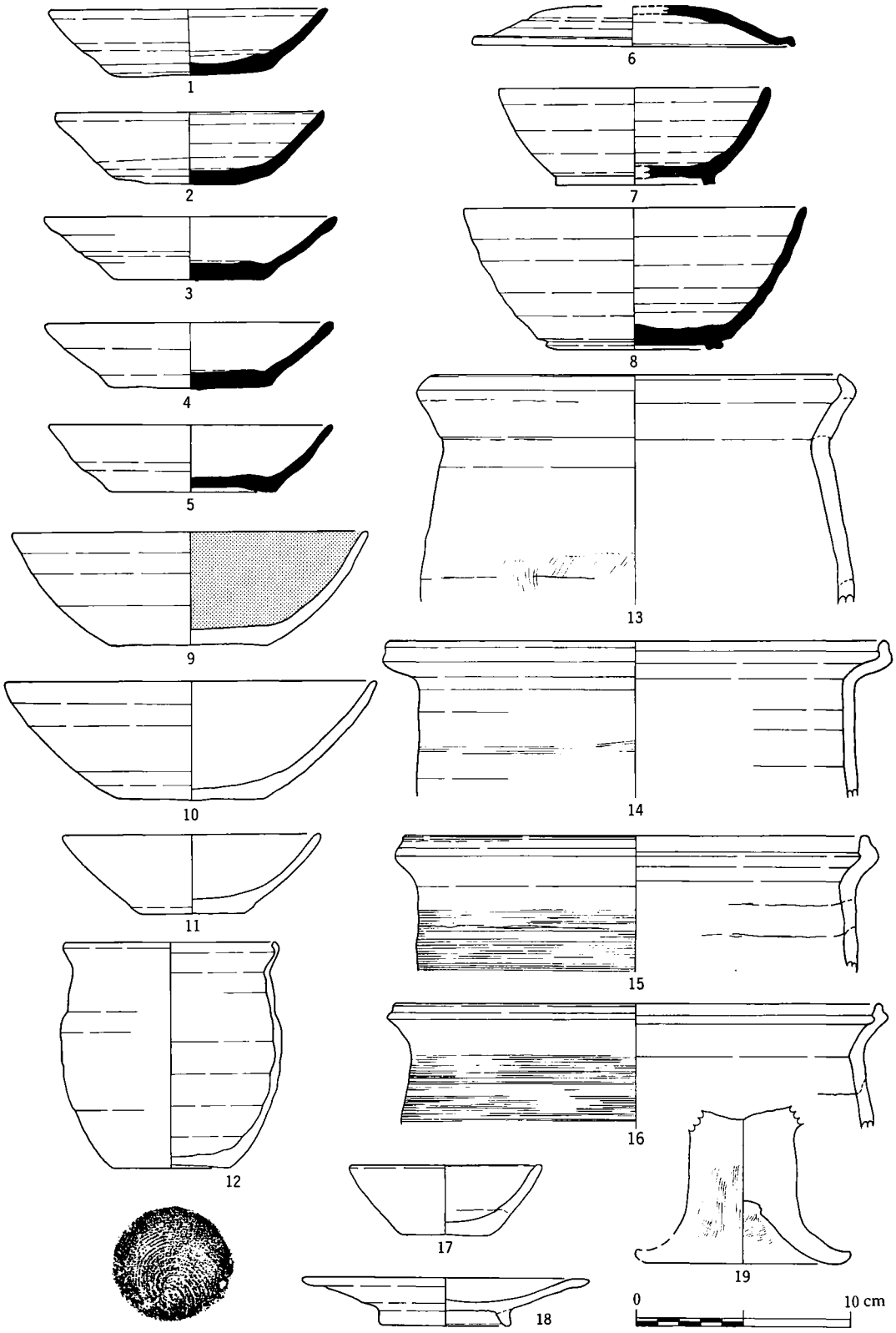


fig. 53　26 号溝出土土器実測図

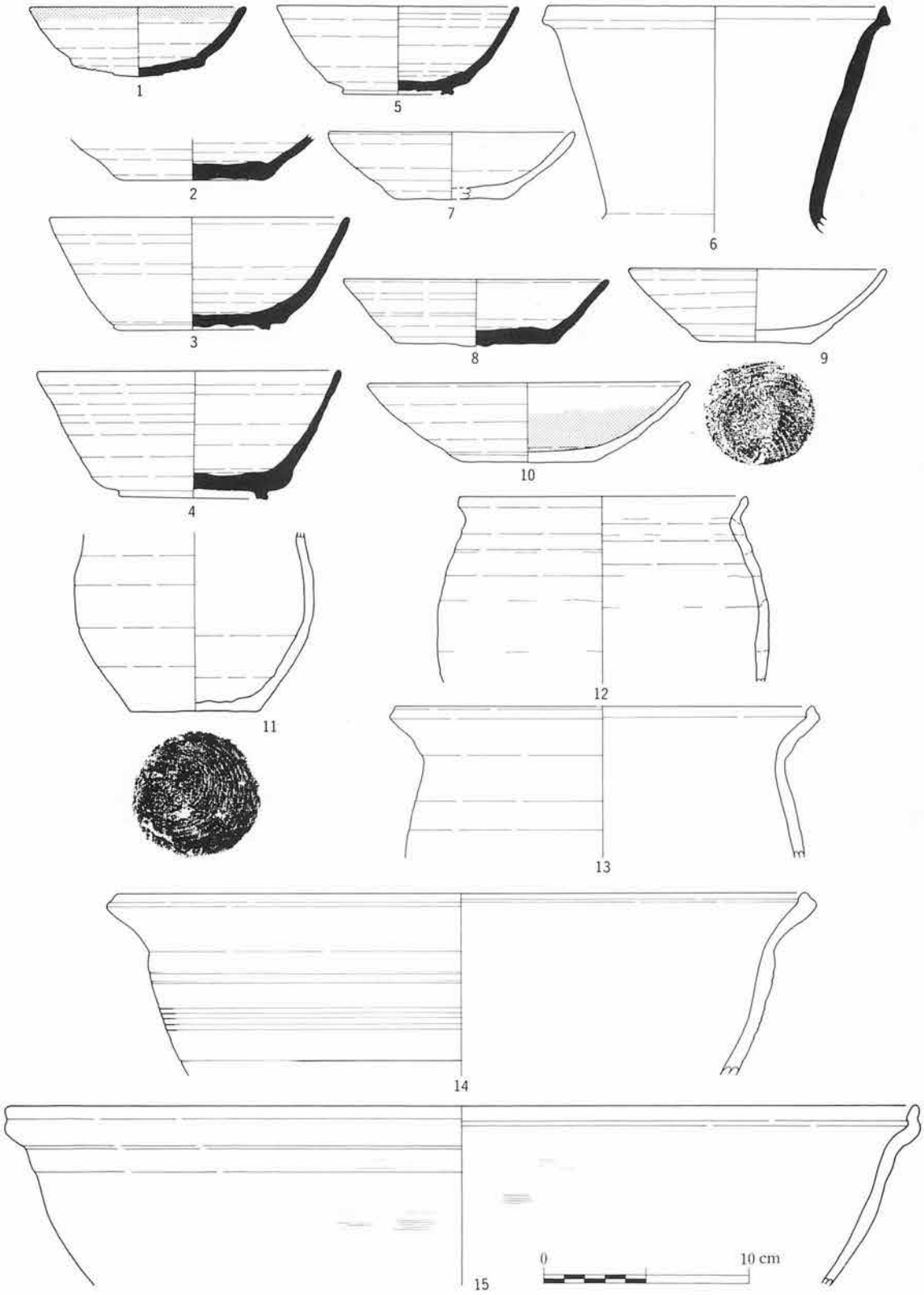


fig. 54　27 号溝出土土器実測図

10　墨書土器と硯（fig. 55・56）

戸水C遺跡を代表する墨書土器は、「依」である。本年度の調査でも「依」が最も多く、その他「上」、「東」、「太田」、「玉」などと読めるものがあった。出土遺構は、溝や建物跡の柱穴などが主である。墨書面は、坏底部外面や蓋などであった。

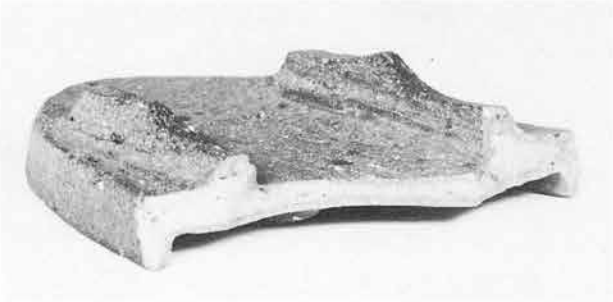


fig. 55　内提「八」の字形の風字硯

硯については、今年度は坏蓋を利用した転用硯が認められたが、今迄に、内提が「八」の字形を呈する風字硯（fig. 55）や、fig.56 の 8 に示した円面硯が出土している。

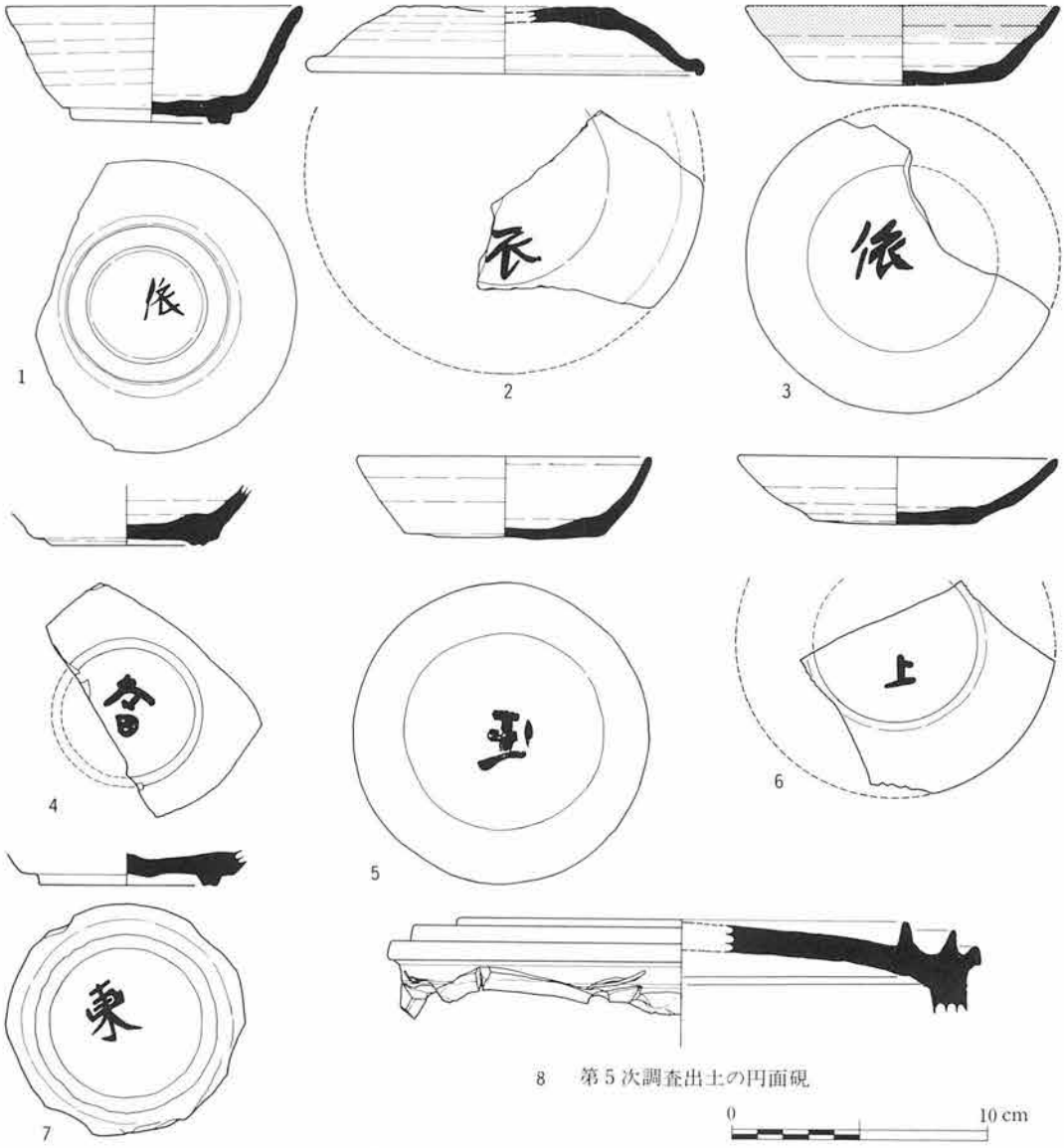


fig. 56　墨書土器各種と円面硯

11　施釉陶器

緑釉陶器（fig. 57 の1 ～12）

図化し得た 12 点について若干その特徴等について記すこととする。1 は、口径 14.8 cm、器高 3.1 cm、高台径 3.7 cm を測る五輪花皿になるものである。輪花は外面よりの指頭によるものと思われ、その両側の口縁端部は 2 ないし 3 個所ヘラ状具により快り取られている。須恵質で内外全面に淡い緑釉を施している。内面見込み部分には径 5.0 cm、同 7.0 cm の圏線が認められる。つぎに陰刻花文を施したものについて見てみよう。2 は全形を知り得ることができないが、高台径 8.2 cm を測るもので、やや大振りの皿（椀か）形をなすものであろう。内面の径 4.2 cm を測る圏線に沿って連続する花弁を施すものである。花弁は三弁一単位で四ケ所に配されるものと推定できる。須恵質のもので内外全面に淡い緑釉を施すものである。3 は、口径 10.0 cm、器高 3.1 cm を測る小形の高台付椀である。内面の圏線に沿って三弁一単位で花弁を四ケ所に連続して線描し、また、口縁端内面にも五単位（三弁一単位）と推定される下向きの花弁が描かれている。このタイプのものは、普通輪花をなすものが多くこれも五輪花椀になる可能性がある。底部には糸切り痕を残す。須恵質で淡い緑釉を施す。4 も 2 と同様な花弁を施す皿形をなすものと思われる。5 も破片であるため全容を知り得ないが、口縁端内面には、ほぼ三弁五単位の下向きの花弁が線描されるものであろう。内面見込みの部分にも花弁が線描されていたかどうか破片のために不明であるが線描されていなかった可能性が大きい。1 ～ 3 と同様に須恵質で釉調も非常に似通っている。9 は、口径 17.6 cm を測るもので体部中央部で屈曲して稜をもついわゆる稜椀である。体部外面稜近くより腰部にかけてはヘラケズリ他はナデと観察される。10 は、口径 19.0 cm 器高 4.8 cm を測る椀である。ベタ高台でヘラケズリされる。（いわゆる切り高台である。）土師質で淡い緑釉を施しているが表面の剝落が甚しく遺存状態は決して良くない。11、12 も同様に碗形のものであるが 11 は須恵質で釉調は暗く、12 は土師質で淡い緑釉を施すものである。また、緑釉陶器の中で底部に糸切り痕を残すものは 3 、4 、7 のみであるが、他は再調整のために観察不可能である。

灰釉陶器（fig. 57 の 13～18）

全形を知り得る資料は少ない。13 は、口径 15.0 cm、器高 4.5 cm を測り底部外面と内面見込み部分には施釉されない。内面見込み部分に重ね焼の痕跡が認められる。胎土は灰白色を呈し、釉は淡緑色の発色をし釉むらが多く見られる。高台は断面三日月形を呈する三日月高台が付けられる。15～16 については内全面に施釉し、残存する外底面には施釉は認められない。15 の底部には墨書痕が見られる。18 は底径 5.2 cm、最大胴径 8.0 cm を測る手付瓶と推定される。灰釉は胴部上方にのみ施釉する。底部には糸切り痕を留める。

これまで 6 次にわたる調査で出土した施釉陶器はかなりの量にのぼる。緑釉陶では椀、皿、手付瓶、唾壺、香炉などがあり、灰釉陶では碗、皿、瓶が出土している。今回報告の分はそのほとんどが猿投窯産（鳴海、篠岡）で 10 のみが京都石作窯の可能性がある。調査年次、調査地点によって新旧の別、産地別が見られ概して猿投窯産が多いのであるが、京都、滋賀産のものもかなりの数量が含まれると思われるが詳細な検討を経ていないので明確なことは言えない。今回の報告の陰刻花文を有するものは、そのほとんどのものについて簡便化が進んでおり黒笹 90 号窯式かそれ以降の所産であろう。また、灰釉陶の 13 も黒笹 90 号窯式のものであろう。

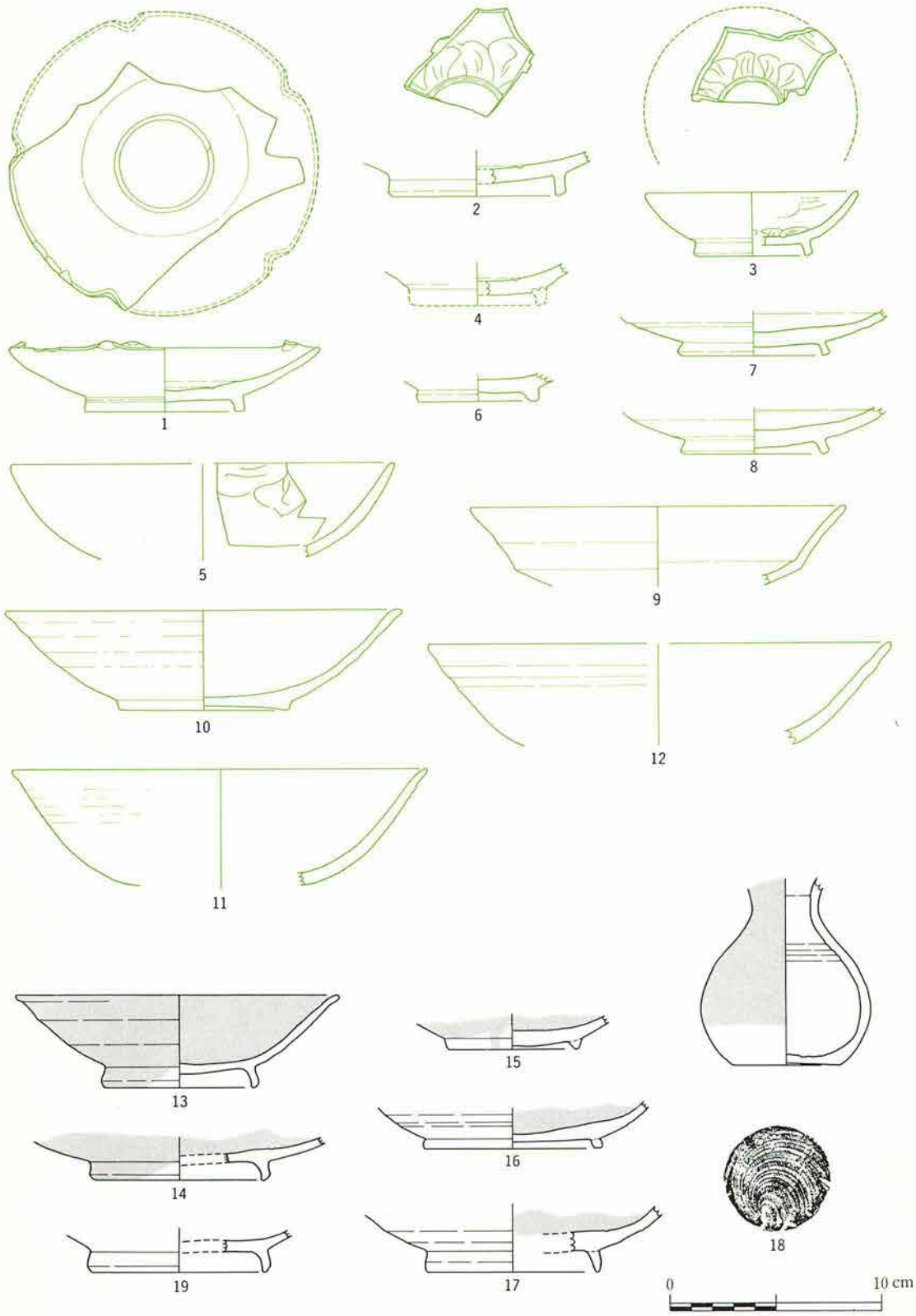


fig. 57　施釉陶器各種実測図

V　祭祀

1　斎串出土の井戸（第5次調査区・fig. 58・59）

第5次調査区内では二基の井戸が確認された。そのうちの一基は6×2間の大型建物跡の南西隅で検出されて、斎串、墨書土器などが出土し、祭祀行為が実施されたことを窺せる注目すべき井戸であった。

斎串は細長い薄板の両端を尖らせ側辺に切りこみを施した木製品で、削りかけ、斎（ゆ）串などとも呼ばれる。形状によって数種に分類されるが、当遺跡出土の斎串は頭部を圭頭状、下部を剣先状に作り両側辺に1対または2対の切りこみを施したもので、このような形の斎串は(4)、人形、馬形などと共に木製模造品が律令的祭祀の中に受けつがれていったとされる7世紀後半に出現、8世紀には畿内周辺に及び、中部、関東地方などに拡がるのは9世紀以降になる。出土した11点の平均法量は全長15.8 cm、最大幅1.9 cm、最大厚0.34 cmを測る。斎串の用途としてはその形態とも考え合わせ、神に奉献する幣を挿む木、また幣や榊の小枝と共に並べて地上に挿した鉾の説(5)など祭祀用具であろうとの推測はなされているが詳細は明らかでない。

墨書土器は井戸内より9点出土している。「宅」、「東」、「奈」と読める墨書がそれぞれ1点、黒色土器に記された「依」が4点、不明2点である。「宅」は横江荘々家跡出土の「三宅」、官衙風の遺構と考えられる富山県高瀬遺跡(6)出土の「宅（カ）」、また吉祥句を意味する「宅安」などの関連性のある類例がある。「依」に関しては、「石田庄」と読める墨書土器を出土した藤江B遺跡、戸水近隣の大友遺跡からも見つかっている。

井戸内出土遺物の時期は平安中期初頭に比定できるが、大型獣骨（馬ヵ）の伴出とも合わせ、この時期戸水C遺跡において何らかの律令的祭祀が行われていた事はほぼ間違いがないように想われる。

fig. 58　斎串出土の井戸

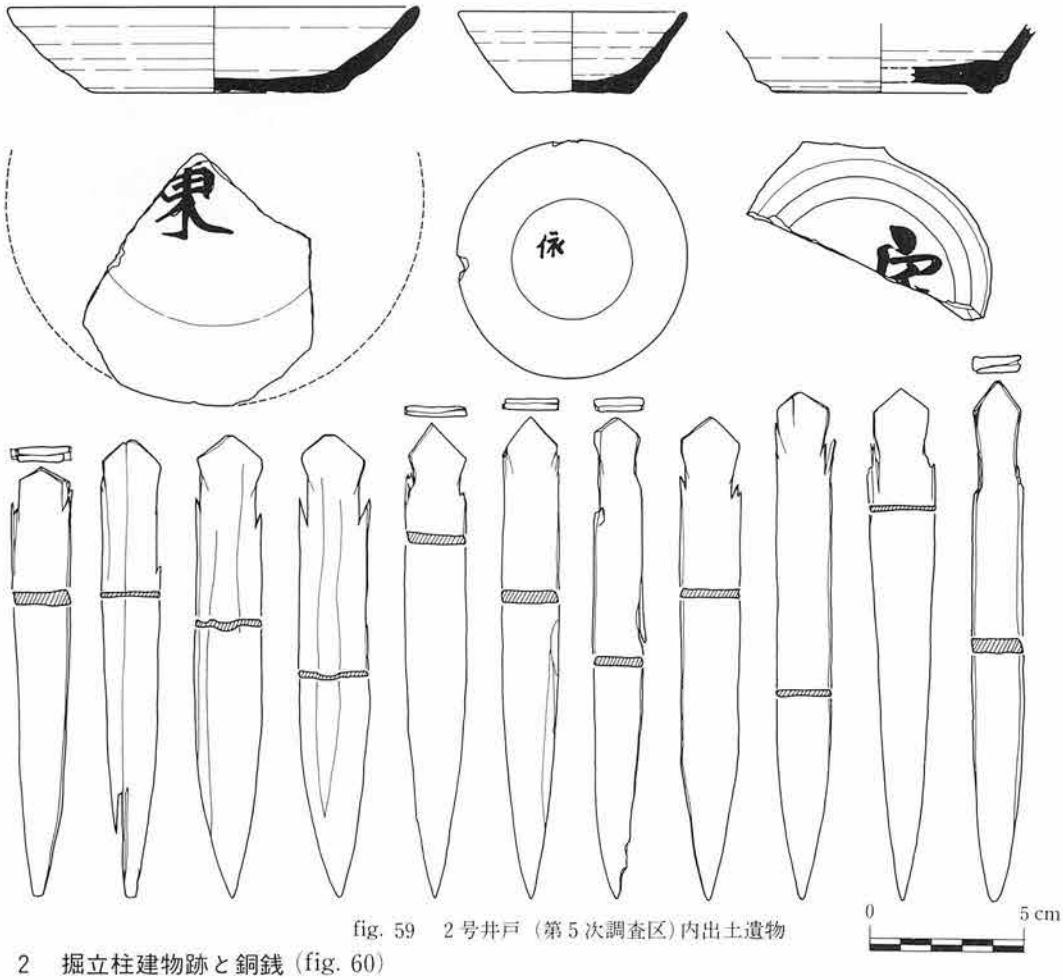


fig. 59　2号井戸（第5次調査区）内出土遺物

2　掘立柱建物跡と銅銭（fig. 60）

本年度調査区にある16号建物跡の西側柱列北第2柱穴掘方より、和同開珎・神功開宝各1点が出土した。建物跡は、3間×2間の一般的な規模を有するものであるが、銅銭は、建物の構築に伴う埋納行為によるものと考えられる。

3　緑釉香炉出土のピット（fig. 14）

第3次調査区において、直径20 cm、深さ30 cmの小ピットより、粉砕された緑釉香炉が出土している。底部内面には「七」と読める刻字があるもので、寺院址等で祭儀に使用された可能性の大きいものである。本例も祭儀のあとで粉砕しピットの中に廃棄されたと考えられる。

fig. 60　銅銭出土の柱穴

Ⅵ　その他の遺物

1　鏡片（fig. 62 の 1）

第５、６次両調査区より出土した３片の鏡片は同一固体として接合され、全体の約８分の１の大きさを窺うことができた。復元口径は 18 cm 位と思われ、蒲鉾縁を呈する縁厚は 0.43 cm を測る。鏡片中央寄りに花弁をあしらった鏡背文様が認められるが、薄く不鮮明で、磨滅したように漫然としている。本鏡の詳細はこれからの鑑定をまたねばならないだろう。

fig. 61　第５次調査区出土の石錘

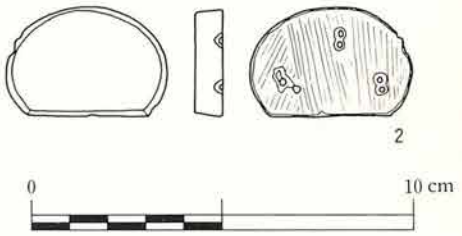


fig. 62　その他の遺物（1　鏡片、2　石錘）

2　石錘（fig. 62 の 2）

石錘は丸鞆形を成し、横 4.2 cm、縦 2.8 cm、厚さ 0.7 cm を測る。表面、側面はよく磨かれているが、裏面は磨かれておらず、３対の貫通する留穴が施されている。また、裏縁には若干の面取りが認められる。

なお、鏡片、石錘ともに、６間×２間の大型建物跡付近から出土しており、その建物跡の性格を考える上で留意する必要があろう。

Ⅶ　ま　と　め

本遺跡は、弥生中期初頭から中世室町期にかけて断続的に営まれた複合遺跡である。なかでも、平安前期～同中期（九世紀～十世紀）を最盛期とするものである。

平安時代における本遺跡の特徴は、一般集落と著しく異なる様相を呈する点である。その第１点は、７間×２間、６間×２間、５間×２間などの大型建物跡を中心とした掘立柱建物跡群の存在である。総合的な配置構造については今後の検討をまたねばならないが、概ね、約 50～60 m の空地部分を隔てて、東西二つの建物跡群が認められる。西側建物跡群は、やや大きな方位の変化みせて建替がなされているものの、南北に主軸を置く一時期があり、大型建物跡の北側に４間×３間の総柱の倉庫様建物を二棟以上配する点が注目される。一方の東側建物跡群は、大型建物跡群を中心にして、大きな方位の変化をみせずⅡ期～Ⅲ期の建替が想定された。第２点は、墨書土器や緑釉・灰釉陶器が著しく多いことである。墨書土器は、「依」「東」が本遺跡周辺の金石地域に集中する傾向がみられ、その分布偏差が注目される。第３点は、斎串や緑釉香炉などを使用した律令的祭祀が実施されていた可能性が強いことである。第４点は、石錘や鏡の出土によって有位層の存在が想定される点である。

以上の諸点から、本遺跡は、平安時代において一般集落とは大きく異なる性格のものであることは明らかであろう。その性格については、本遺跡が大野川を媒介とする水運を活用できる位置環境にあることや、初期庄園を知る有効な資料を提供した藤江Ｂ遺跡や本遺跡と近接する大型建物跡を有する畝田無量寺遺跡などとの周辺遺跡との関連を重視する必要があろう。なかには、石田庄の庄所的建物群とする推測もなされているが、今後の詳細な検討にゆだねたい。

註

（1） 橋本澄夫「鳥越村下吉谷遺跡出土の前期弥生式土器」（『石川考古学研究会々誌』第24号・1981年）

（2） 宮下幸夫『戸津9号窯』（小松市教育委員会・1980年）

（3） 浜岡賢太郎「給分小袋1号窯跡」（『富来町史』・1974年）

（4） 金子裕之「古代の木製模造品」（『研究論集』VI・奈良国立文化財研究所・1980年）

（5） 『伊場遺跡発掘調査報告書』第3冊・浜松市教育委員会・1978年

（6） 「井波町高瀬遺跡」（『富山県埋蔵文化財調査報告書III』・富山県教育委員会・1974年）

上記の他、『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報』(1)～(5)を全体にわたって参考にしている。

金沢市戸水C遺跡

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書
（6）

印刷・発行　1983年3月
編集・発行　石川県教育委員会
印刷所　㈱橋本確文堂

柳田